

日本における鮪のマグロ類への比定の歴史

武藤文人*¹

On the history of acceptance of a Chinese character as tunas in Japan.

Fumihito MUTO

Abstract

The historical acquisition of a Chinese character for tuna species in Japanese language is reviewed by examining ancient and recent literatures. A set of six Chinese characters identified as tuna and other species first appeared in around 1000 B.C. This study found historical changes of meanings of these Chinese characters express tuna species in the modern era. Findings from this study may open the door to identify historical uses and status of fishery resources from paleographical archives.

マグロ類が鮪になるまで

マグロ類はサバ亜目サバ科の大型回遊魚である。「マグロは鮪でツナである」と、一般には信じられている。しかし、正確に言えば、マグロは鮪でもツナでもない。それぞれが何を示すかは時代や地域により異なっている。漢字の鮪は、我が国においては訓読みに「まぐろ」または「しび」が示され、一般に、マグロ類を示すものと理解されている（諸橋，1968）。一方、中国においてはマグロは金槍魚と表現される（大東文化大学中国語大辞典編纂室，1994）。

現在、マグロには鮪の漢字が用いられているが、この字は元来はシナヘラチョウザメ（ハシナガチョウザメ）*Psephurus gladius* (Martens, 1862) を示していたとの説がある（坂本，2000）。

漢字の鮪が現在のようにマグロを示すようになった経緯については詳細がかならずしも明らかでない。筆者はこれについて、明治～昭和期に活躍した魚類学者が考察を行っているのではないかと考えた。また、漢字の「鮪」に対して各時代に示された実態が明らかとなれば、文書類に示されたマグロ類の漁獲情報の把握も可能になり、長期的

な資源変動を知る手がかりとなると考えられた。そこで、本稿では入手可能な文献から以下のように推定を行い、鮪とは何を示すのかを古代から現代までたどり、概説した。

1. 中国古典文献中の鮪 (Fig. 1, Table 1)

古代中国で作成された漢字は、時代と場所により意味を変えながら現在まで使われ続けている。鮪の字義について考える場合、関連の深い漢字はその他に5つある（Table 1）。これらのうち「鮪（い）」の記述は、古典文献中の周禮（しゅうらい）まで溯ることができる（Anon., n.d.1.）。周禮は中国の古王朝の周の儀典に関する書籍である。その成立を周王朝の最初期とすれば、紀元前1,000年となり、鮪の字そのものは3,000年前からあったこととなる。ただし、周禮には「春獻王鮪」とあるだけで、魚種の特徴は示されていない。続いて中国の古代の詩歌を集めた詩経（しきょう）に「てん い はつはつ鯨鮪ひてん ひい發發」および「てん い はつはつ鯨鮪ひてん ひい匪鮪」という語句が現れる（Anon., n.d.3；目加田，1969）。これらの現れる詩の舞台は、前者は黄河、後者は黄河と長江である。何らかの淡水魚であることはわかるが、やはり魚種の特徴は示されていない。

中国古典文献の中では、爾雅（じが；Anon., n.d.2）と

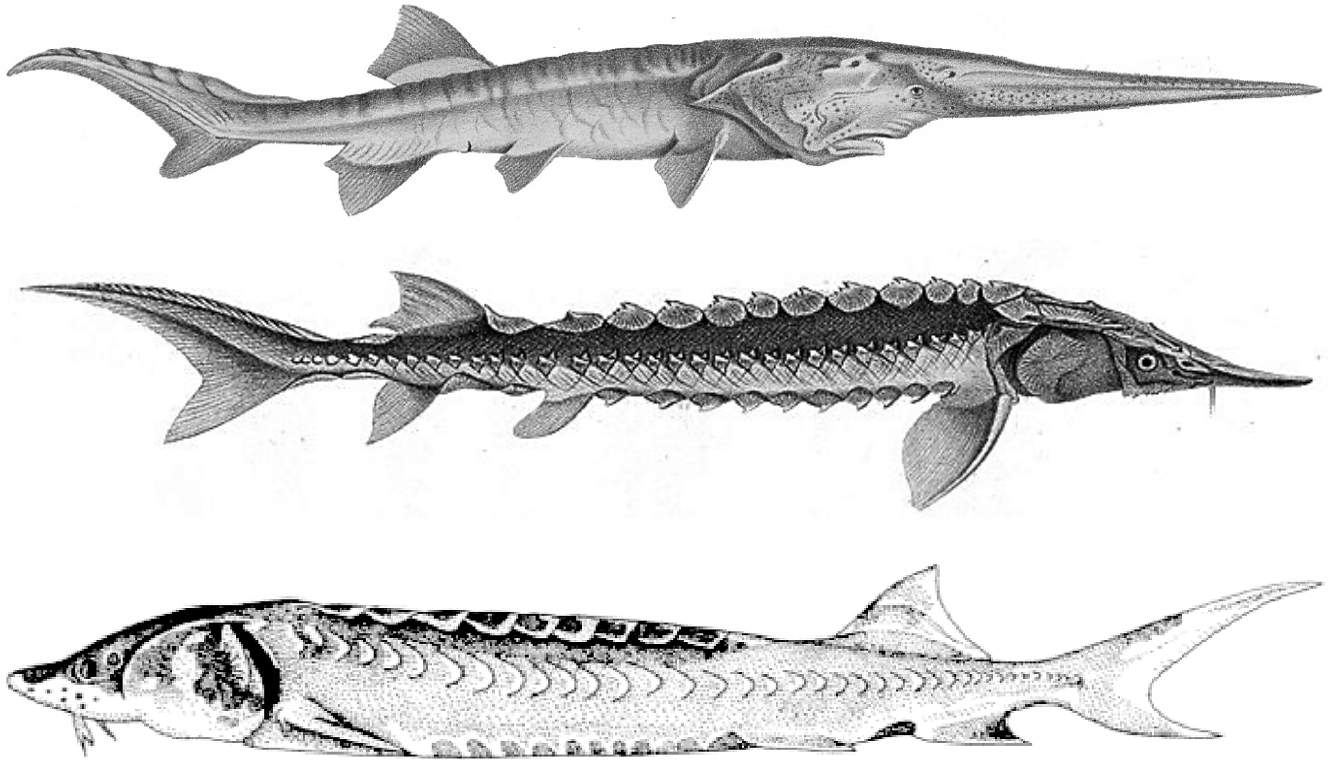


Fig. 1. Identified “i” species in the ancient Chinese literatures. Chinese Paddlefish *Psephurus gladius* (Martens, 1862) (upper) and Yangtze Sturgeon *Acipenser dabryanus* Duméril, 1869) (middle) from Duméril (1869). Chinese Sturgeon *Acipenser sinensis* Gray, 1835 (lower) from Kim (1997). Common and scientific names followed Amaoka and Muto (2003). See also Table 1.

中国古代文献中の「鮪」類。(上) シナヘラチヨウザメ (ハシナガチヨウザメ, ハシナガヘラチヨウザメ) *Psephurus gladius* (Martens, 1862) と (中) ダブリーチヨウザメ (チヨウセンチヨウザメ) *Acipenser dabryanus* Duméril, 1869) は Duméril (1869) より。(下) カラチヨウザメ *Acipenser sinensis* Gray, 1835の図は Kim (1997) より。チヨウザメ類の和名と学名は尼岡・武藤 (2003) に従った。

Table 1. List of Chinese characters for fish names to be concerned in this study.

Characters	Traditional Pronunciations (after Morohashi, 1969)
鮪	<i>I</i>
王鮪	<i>Ou-I</i>
叔鮪	<i>Shuku-I</i>
鰯	<i>Raku</i>
鰯子	<i>Raku-Shi</i>
鰹	<i>Shin</i>
鰹	<i>Shin</i>
鰹	<i>Ten</i>
鮫	<i>Kou</i>

その注釈書によって、鮪その他5文字の意味が確定していたようだ。爾雅は中国最古の字典で、周公旦（しゅうこうたん）の著作との説もあるが（邢昺, n.d.）、実際の成立はそれよりは新しいだろう。爾雅の魚に関する部分「釋魚」を見てみると、「鯉 鱣 鰻 鯢 鰭 鮠 鰪 鰩 鰻 鰾 鰼 鰽 鰿 鰻 鰾 鰼 鰽 鰿」

鮓 鯉大鯛小者鮓 鮓大鰻小者鮓 鯉大蝦 鯉魚子 鯉是鯉 鯉
小魚 鯉鮓鮓」とあるだけで、単語と、まれに同義語が示
されるのみで、ほとんど説明はない。なお爾雅に続いて成
立した説文解字（せつもんかいじ；許慎，100）も字書と
して名高いが、本書は鮓については周禮に出典があること
と、音が有であることを示すのみである。

爾雅の最古の注釈書は郭璞（かくはく、生没年276-324）による爾雅注（じがちゅう）である。爾雅注の「釋魚第十六」において郭璞は鮪に関連する魚種ではまず次のように「鰈^{てん}」に言及している。

「鱣 鱣大魚似鰻而短鼻口在頷下體有邪行甲無鱗肉黃大者二三丈今江東呼為黃魚」

この記述から、鱣の魚種推定がある程度可能である。まず、鱣は大型魚である。「大者二三丈」は「大型個体は2～3丈」、これを西晋の丈(10尺 $\approx$ 241.4cm：丘, 2000)で換算すれば4.6-6.9mとなる。話半分と割り引いても2メートルは超えるが、環境が良好で漁獲圧も低い古代には、あらゆる魚種で現在より大型の個体があったのかもしれない。「今江東呼為黄魚」を解釈すれば「江東(揚子江下流域)に分布し、黄魚と呼ばれている。」となる。

淡水魚の分布は、生物地理区ごとに特徴があるが、そこ

から鱣の示す魚種の絞り込みが可能である。揚子江下流域は旧北区の南端に位置し、淡水魚の組成は比較的単純で、コイ科魚類が優勢である（松原・落合・岩井, 1979）。この地域にいる大型淡水魚として、ソウギョ *Ctenopharyngodon idellus* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1844), アオウオ *Mylopharyngodon piceus* (Richardson, 1846) などのコイ科魚類, ナマズ *Silurus asotus* Linnaeus, 1758などのナマズ科魚類, そしてチョウザメ科魚類が候補にあげられる。郭璞の記述内容から、魚種はさらに絞り込まれていく。

郭璞の「短鼻口在頤下體有邪行甲無鱗」を解釈すれば、「吻が短く口が頭部腹面にあり、通常の鱗はなくて骨の板のような硬鱗がある」となる。これには一部のチョウザメ類が該当する。揚子江近辺からチョウザメ類は3種知られるが（Fig. 1）, 硬鱗が顕著で大型となるダブリーチョウザメ（チョウセンチョウザメ）*Acipenser dabryanus* Duméril, 1869に最も合致するだろう。

一方、郭璞の記述の「鱣大魚似鱣而短鼻」を論理的に考えれば、鱣の示している魚種も推定される。この部分は「鱣は大魚で鱣に似るが吻は短く」であるから、「鱣も大魚で鱣に似るが吻が長い」ことになる。そのような魚種の候補はシナヘラチョウザメ *Psephurus gladius* (Martens, 1862) が有力となる。

では爾雅注は「鮠」についてはどう述べているだろうか。「鮠属也」, すなわち鮠に類似する魚種である、との記述である。これだけでは種判別はむずかしい。しかしチョウザメ類とはいえるだろう。ダブリーチョウザメでもシナヘラチョウザメでもないとするれば、やや小型のカラチョウザメ *A. sinensis* Gray, 1835ということになる。

爾雅注では鮠（い）を大小で分け、大きい順に王鮠（おうい）, 叔鮠（しゅくい）, 鮠子（らくし）としている。これらがそれぞれ別種であれば、文献上に知られる最大の大きさ順に並べて、それぞれシナヘラチョウザメ（3m; Mims *et al.*, 1993）, ダブリーチョウザメ（チョウセンチョウザメ）（2.5m; Kim 1997）, カラチョウザメ（1.3m; Kim 1997）となる。あるいは王鮠・叔鮠・鮠子はそれらの種の成長段階を含んだ分類とすべきかもしれない。

唐の時代の陸徳明（583）の經典釋文（けいてんしゃくもん）は、それ以前に書かれた古代文献類の注釈書である。ここではいわゆる反切法による各文字の発音が示されている。中村（2003）に準拠して反切による発音も読み取っていくと「鮠 張連反即黃魚也」は、「鮠の発音はチン（張連を組み合わせて示される）, すなわち黄魚である」となる。その後にある「鱣 音尋又音淫字林云長鼻魚也重千斤」は「鱣は音がジン（尋）またはイン（淫）, 字林に言う長鼻魚である。重量は千斤」となる。さらにそれに続く「鮠 千軌反字林千九反或曰即鱣魚也似鱣而長鼻體無鱗甲」は「鮠の発音はチュウ（千軌のくみあわせ）, 字林（じりん）では音を千九の組み合わせで示し、またそれによると

鱣と同じもので、鱣に似るが鼻が長く体に鱗や甲がない」と解説できる。

したがって、經典釋文では鮠を鱣と同じものとし、両者はチョウザメ類に似ているが吻（鼻）が長く、鱗や板状の硬鱗がない魚種と述べていることがわかる。つまり、鮠と鱣はシナヘラチョウザメと特定される。そして、この記述は爾雅注以外の爾雅の注釈書、本草書にどんどん転載されていく。そのような注釈書にはたとえば北宋（960-1127年）の邢昺（けいへい）による爾雅注疏（じがちゅうそ）がある（邢, n.d.）。その表紙を見ると、「（晉）郭璞注, （唐）陸徳明音義, （宋）邢昺疏」と書かれている。つまり本書は爾雅をベースに郭璞の注釈である「注」, 陸徳明の注釈である「音義」, 邢昺の注釈である「疏」が含まれることになる。また、本書を含む連綿とした引用の過程で、本体は失われて伝わっていない「字林」の内容が、孫引きの形で伝わっていくこととなった。

時代は下って、李時珍（り じちん; 1578）の「本草綱目」（ほんぞうこうもく）は、考証学的には問題があるとされつつも、その実用性の高さから中国および我が国の本草学と漢方医学に大きな影響を与えた（渡邊, 1953）。本草綱目では鮠魚と同一のものとして鮠魚が示されている。鮠の字は爾雅や爾雅注には表れないが、經典釋文には鱣の発音に尋と淫の2つが示されている。鱣鮠両者は同音の同義語で、鮠は鱣より後代に発音に基づいて作成されたと考えるのが妥当だろう。諸橋（1968）は「曉讀書齋雜録」から「鱣, 俗作鮠, 字書無鮠字」を引用している。これは当方の考えに合致する。「曉讀書齋雜録」は洪（n.d.）と思われるが、実見していない。現在、日本では鱣はエイを指すが、その経緯は別稿に譲る。

本草綱目では鮠の発音には洧が示されている。これはカタカナならばヱ, ローマ字ならばwiに相当するだろう。李時珍の鮠・鮠の記述を現代風に表記すれば、体背面は暗色で体腹面は明色、吻は長く軀幹部とほぼ同等、口は顎の下にあり、肉は白い。これらの記載内容のうち、長い吻や口の位置はマグロ類には一致しない。万里の長城の内側と東シナ・南シナ海沿岸域で該当種を考えらと、鮠・鮠に該当する種はシナヘラチョウザメとなる（Fig. 1）。

2. 日本古典文献の鮠, 真畔（まぐろ）, 志毘など

2.1 記紀万葉の時代

このように、中国においては「鮠」は、各文献で異同がありつつも、漠然とチョウザメ類、あるいはその中のカラチョウザメやシナヘラチョウザメを示していた。一方、チョウザメ類の分布が貧弱な我が国では、海産大型魚の「しび」を想定した独自の使われ方がされていった。

712年に朝廷に献上された古事記には「しび」が出現する。ここではまだ鮠の字は出てこないが、皇族を交えた痛烈な展開がある。

（原文）

故將治天下之間 平群臣之祖名志毘臣 立于歌垣 取其
袁祁命將婚之美人手 其孃子者 菟田首等之女 名者大魚
也 爾袁祁命亦立歌垣 於是 志毘臣歌曰

意富美夜能 袁登都波多傳 須美加多夫祁理
如此歌而 乞其歌末之時 袁祁命歌曰

意富多久美 袁遲那美許曾 須美加多夫祁禮
爾志毘臣亦歌曰

意富岐美能 許許呂袁由良美 淤美能古能 夜幣能斯
婆加岐 伊理多多受阿理

於是王子亦歌曰

斯本勢能 那袁理袁美禮婆 阿蘇毘久流 志毘賀波多
傳爾 都麻多弓理美由

爾志毘臣愈怒歌曰

意富岐美能 美古能志婆加岐 夜布士麻理 斯麻理母
登本斯 岐禮牟志婆加岐 夜氣牟志婆加岐

爾王子 亦歌曰

意布袁余志 斯毘都久阿麻余 斯賀阿禮婆 宇良胡本
斯祁牟 志毘都久志毘

如此歌而 闕明各退

明旦之時 意富祁命 袁祁命二柱議云 凡朝廷人等者
旦參赴於朝廷 晝集於志毘門 亦今者 志毘必寢 亦其門
無人 故非今者 難可謀 即興軍圍志毘臣之家 乃殺也

以下、西宮（1982）より読み下しを引用すると、

かれ、天の下治たまはむとする間に、平群臣が祖、名は
志毘の臣、歌垣に立ちて、その袁祁の命の婚わはむとせし
美人の手を取りき、其の孃子は、菟田の首等の女、名は大
魚なり。しかして袁祁の命も歌垣に立たしき。ここに志毘
の臣が歌いしく、

大宮の をとつ端手 隅傾けり
かく歌ひて、その歌の末を乞いし時に、袁祁の命の歌ひた
まひしく、

大匠 拙劣みこそ 隅傾けれ
しかして、志毘の臣、また歌ひしく、
王の 心を緩み 臣の子の 八重の柴垣 入り立たず
あり

ここに王子、また歌ひたまひしく、
潮瀬の 波折りをみれば あそびくる しびが端手に
妻立てり見ゆ

しかして志毘の臣、いよいよ怒りて、歌ひしく、
王の 御子の柴垣 八節縛り 結りもとほし 切れむ
柴垣 焼けむ柴垣

しかして王子、また歌ひたまひしく、
大魚よし しび突く海人よ しが離れば 心恋しけむ
しび突く志毘

かく歌いて、闕ひ明かして、おのおの退きぬ。

明くる旦の時に、意富祁の命・袁祁の命の二柱、議りし
て云いらししく、「すべて、朝廷の人等は、旦は朝廷に参
赴き、昼は志毘が門に集へり。また今は、志毘必ず寝ねた

らむ。またその門に人もなけむ。かれ、今にあらざるは謀る
べきこと難けむ」。

とのらして、すなはち軍を興して志毘の臣が家を囲みて、
すなわち殺したまひき。

古事記で「しび」の登場するこの場面にあらわれるおも
な人物は「大魚（おうお）」の名を持つ娘、その娘に惹か
れた「志毘（シビ）」の名を持つ平群（へぐり）家の若
者、同じくその娘に惹かれた皇子（後に即位）である。人
／魚の両義的な志毘と大魚について、シビが大魚の一種で
あることもふまえて和歌による掛け合いがなされている。
なお、シビの漢字表記に志毘と斯毘の2種類を用いてい
る。斯毘の方は「そのシビ」の意味なのかもしれない。そ
して、歌のやりとりが中傷へととなり、さらに皇族と平群家
の部族間抗争に発展している。古事記に類似するやりとり
は日本書紀にも記載され（坂本ほか、1965）、ここには大
伴家持の祖先の大伴金村も参戦している。日本書紀では登
場人物の名が「平群真鳥大臣：へぐりのまとりのおとど」
の「男（＝息子）」の「鮪（しび）」となるほか、内容にも
古事記との若干の矛盾があるが、いずれが正しいとして
も、5世紀の出来事である。720年成立の日本書紀では、
「鮪」をどのように訓読したかであるが、「茲寐」および
「思寐」の表記が示され、「しび」と発音すべきことが分か
る。

一方、万葉集には山部赤人と大伴家持の鮪^{しび}の漁を織り込
んだ歌がある（青木ほか、1984）。家持は金村の6代嫡孫
にあたり、血統的・心理的に近い人物である。

引用06 0938 山部宿祢赤人作歌一首 并短歌

八隅知之 吾大王乃 神随 高所
知流 稻見野能 大海乃原笑 荒妙
藤井乃浦尔 鮪釣等 海人船散動 塩焼等
人曾左波尔有 浦乎吉美 宇倍毛釣者為 濱
乎吉美 諾毛塩焼 蟻往来 御覽母知師
清白濱
（訓読）

やすみしし わごおほきみの かむながら たかしらせ
る いなみのの おほうみのはらの あらたへの ふちみ
のうらに しびつると あまぶねさわく しほやくと ひ
とぞさはにある うらをよみ うべもつりはす はまをよ
み うべもしほやく ありがよひ めさくもしるし きよ
きしらはま

引用 19 4218 見漁夫火光歌一首

鮪衝等 海人之燭有 伊射里火之 保尔可将出 吾之下
念乎
（訓読）

しびつくと あまのともせる いざりひの ほにかいだ
さむ わがしたおもひを

Table 2. List of common names and their scientific names to be concerned in this study.

Japanese Names	English Names	Scientific Names
クロマグロ	Pacific Bluefin Tuna	<i>Thunnus orientalis</i> (Temminck & Schlegel, 1844)
メバチ	Bigeye Tuna	<i>Thunnus obesus</i> (Lowe, 1839)
キハダ	Yellowfin Tuna	<i>Thunnus albacares</i> (Bonnaterre, 1788)
ビンナガ	Albacore	<i>Thunnus alalunga</i> (Bonnaterre, 1788)
マカジキ	Striped Marlin	<i>Tetrapturus audax</i> (Philippi, 1887)
シロカジキ	*Black Marlin	<i>Makaira indica</i> (Cuvier in C. & V., 1832)
クロカジキ	*Blue Marlin	<i>Makaira mazara</i> Jordan & Snyder, 1901
メカジキ	Swordfish	<i>Xiphias gladius</i> Linnaeus, 1758

*These names totally different from meanings of Japanese names.

ここで思い出されるのは、古事記の志毘 / 斯毘 (しび, 2つの漢字表記があった) の歌のやりとりである。万葉集の伴家持の歌は、古事記の歌と語句がよく似ている。これは、家持の時代に朝廷周辺では知られていた5世紀の抗争に関する伝承や、あるいはそれに深く関わった金村以来の伴家持の伝承による当時の様子から、本歌取り的な連想で作歌したのかも知れない。この歌は恋歌とされているが、別の解釈も可能であろう。783年ころに完成したとされる万葉集では、表音文字としての漢字の万葉仮名と、表意文字としての漢字が併用されている。そして、表意文字としての「鯖」が家持と赤人の歌にそれぞれ「鯖衝等 (しびつくと)」「鯖釣等 (しびつと)」と現れている。

これらのことから、日本の古代から、「シビ」と呼ばれる魚が認識されていて、また日本書紀や万葉の完成した8世紀ころからそれに漢字の「鯖」があてられることもあった、ということがわかる。これら文献に志毘や鯖の魚としての特徴に関する記述はないが、「大魚よし」と歌われていることや「鯖衝く」=「銚で突き止めて捕獲する」という漁法から、大型の魚種である。また、万葉集の記述からは明らかに海産魚である。

2.2. 本草学の時代 (Table 2)

和名類聚抄 (鈔) (わみょうるいじゅうしょう) は記紀万葉の時代からやや経った承平年間 (じょうへいねんかん, 931-938年) に源順 (みなもとのしたごう) が編集した辞典である。和名抄 (わみょうしょう) とも呼ばれる。

「鯖 食療経云鯖 音委 一名 黄頰魚 和名之比 爾雅注云大為王鯖 小為叔鯖」

(上記原文のうち「音委」や「爾雅注」の部分は、写本によって文字が異なっているが、当方の判断で正しいと思われるものを選んだ。)

和名類聚抄は諸々の中国古典を簡潔に引用している。「食療経」は「しょくりょうけい」と読まれるのであろうが、実態が把握できない。「食療本草」(孟・張, 688)と

は名称が類似しているが、これとは別に引用されており、また、確認したところ該当する記述はない。新美・鈴木 (1968) によれば、「食療経」は我が国の文献類の引用にのみ知られており、その本体は失われて伝わっていないらしい。

平安からずっと時代が下って江戸期になると本草学の文献に魚名のみならず、魚の特徴の記述や図版が含まれるようになった。

人見必大 (1695) の「本朝食鑑」の出版は元禄時代で、日本の食物に関する百科全書である。著者は江戸の人である。(日本の本草書では、筆者や編者の居住地により記述内容に差が見られるので、以下同様に示してゆく。)「本朝食鑑」では鯖の訓に之比 (しび) をあてて同類中の大型魚の呼び名とし、大鯖 (おおしび) を1-2丈 (約3-6m)、小鯖 (こしび) を7-8尺 (約2.1-2.4m) としている。また鯖の小型魚を真黒 (まぐろ) と目鹿 (めじか) とし、前者を4-5尺 (約1.2-1.5m)、後者を2-3尺 (約60-90cm) としている。これらの呼び名は現代のクロマグロ *Thunnus orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844) の呼称にも通じるが、魚体はいずれも大きすぎるように思われる。それぞれ1/2程度ならば納得がいく。あるいは古代中国文献中の鯖の大きさの記述を、周代と元禄時代=清代との尺度の変化を考慮して換算して記述したのかも知れない。また目鹿の京阪地方での呼び名の目黒 (めくろ) をしめしている。マグロの語源は「めぐろ」ではないか、ともしばしば耳にする。本書その他で真黒と目黒が別カテゴリーである点は注目に値する。

チョウザメ類が日本で知られていなかった中で、日本でクロマグロの名称が大ききで異なっていることと、爾雅注で鯖を大小に分けていることの整合性を取れば、混乱が生じる。本朝食鑑では叔鯖を真黒、鰯子を目鹿に擬している。王鯖についてはその味がよいためか大きい故か、分からないとし、日本名との対応を保留している。本書にいたって、日本に伝来して以降、漠然と大型魚類を指していた

「鮪」の字は、確実にマグロ類を示すようになった。さらに、本書は版を重ねたため、後々まで影響があった。現代でも本書は和訳・解説付きで再出版されており、「鮪」については魚類学者の木村 重（きむら しげる）の本草綱目の解説も転載されている。木村氏の解説については後に述べる。

次に本草書として取り上げるのは、貝原好古（1694）の「和爾雅」である。貝原好古は福岡藩の出身である。本書は爾雅注の内容をごく簡略に示しているにすぎないが、項目名にはフリガナが施してある。鰯魚はシビ、王鮪はヲホシビ、叔鮪にはコシビのフリガナがある。つまり鰯や鮪をマグロ類とみている。一方、貝原好古の養父（叔父）の貝原益軒は、その後さらに詳細な本草書を記した。「大和本草：やまとほんぞう」である（貝原，1709）。貝原益軒は健康書の「養生訓：ようじょうくん」（貝原，1712）でもしる著名だが、儒学・本草学が主たる専門で、「女大学」（貝原1716）などの教育書の著者でもある。福岡藩を一旦浪人した後、藩に戻った。大和本草では鮪（い）を鰯（じん）の異体字として、志毘（しび）とは別項目を立て説明している。志毘とは、大和本草では記述内容から判断してマグロ類を示しているが、本書ではこの類について大きさによる名称の使い分けを記録しており、大型魚が「しび」、小型魚が「まぐろ」、最小魚が「めじか」である。漁法なども示されていて、主として北九州のマグロを元に記述がなされているようである。貝原益軒の論考は養嫡子の好古よりはるかに鋭く深く、李時珍（1578）の本草綱目の鮪の記述を検討し、以前より「鮪」を日本の志毘の字にあてているが、合致する魚種は日本にいない、と看破した。ただし、鮪とすべき種に、李時珍の鮪とは別種がいてそれが日本のシビに等しいかも知れないと迷いを見せている。その上で、爾雅注の鮪も日本のシビと同様に大小で名前の使い分けをしているので、もしも志毘と鮪が同じならば爾雅注の王鮪はしび、叔鮪はまぐろ、鰯子はめじかに相当するだろうと結論した。

寺島良安（編）（1712）の「和漢三才図会：わかんさんさいずえ」は、105巻81冊におよぶ膨大な著作である。編者の寺島良安は大阪の医師である。鮪は巻第五十一に掲載され、この巻には「江海無鱗魚」に分類された種が並ぶ。この中では「鮪」に訓読みとして「しび」と「はつ」を、音に「委」（い）を、中国語の読みを「ライ」（今日風に書けばwiとなろうか）をそれぞれ示している。訓読みにはハツが入っているのは、寺島氏が大阪人だからだろう。和漢三才図絵の鮪は大きさによって品目に分けられ、最大が之比（しび）あるいは波豆（はつ）、2番目に大きいのを末黒（まくろ）、3番目を目黒（めくろ）、最小が目鹿（めじか）である。人見（1695）の「本朝食鑑」では江戸で「目鹿」とする魚の京阪地方での呼び名を目黒としているが、ここでは同一物の成長による名前の変化とされている。一



Fig. 2. *I* from “Wakan Sansai Zu E” (Terashima, 1712). From collection of the National Diet Library. The book says “Probably *I* belongs same genus of *Sen*, and same category of *Jin*.” According to other descriptions in this book, tuna was considered as similar animal with sharks. Emphasized preopercular bone maybe for the coincidence with descriptions in Kei (n.d.) and related ancient Chinese literatures.

（和漢三才図会に示された鮪。国会図書館収蔵。「案ずるに鮪もまた鰯の属にて鰯の類なり」とされ、マグロはサメに近いと考えられていた。目の後方の前鰓蓋骨が強調されているのは、爾雅注疏やそれを引用した中国諸古典の「頭部が鉄兜状」という記載に合致させるためだろう。）

方で、鰯を「かじとおし」すなわちカジキ類と同定し、鰯を「ふか」すなわちサメ類と同定している。これら2字はいずれも元来はチョウザメ類と考えられるのであるから、さらなる混乱が生じている。王鮪、叔鮪、鰯子については同種内の大中小とし、王鮪に之比または波豆を、叔鮪を目黒、鰯子を目鹿と同定した。多くの場合、和漢三才図会には簡単な魚体図が示されている。鮪については、マグロ類らしき頭部が海面からのぞいている図が示されている（図2）。

なお、和漢三才図会のすぐ後に、神田玄泉（1719）の絵入りの魚類図鑑「日東魚譜」が記されたが、記述内容の原出典が明らかでなく、また版ごとに内容がかなり違っている。本書は本草家以外にも手軽な内容なので広く読まれ、

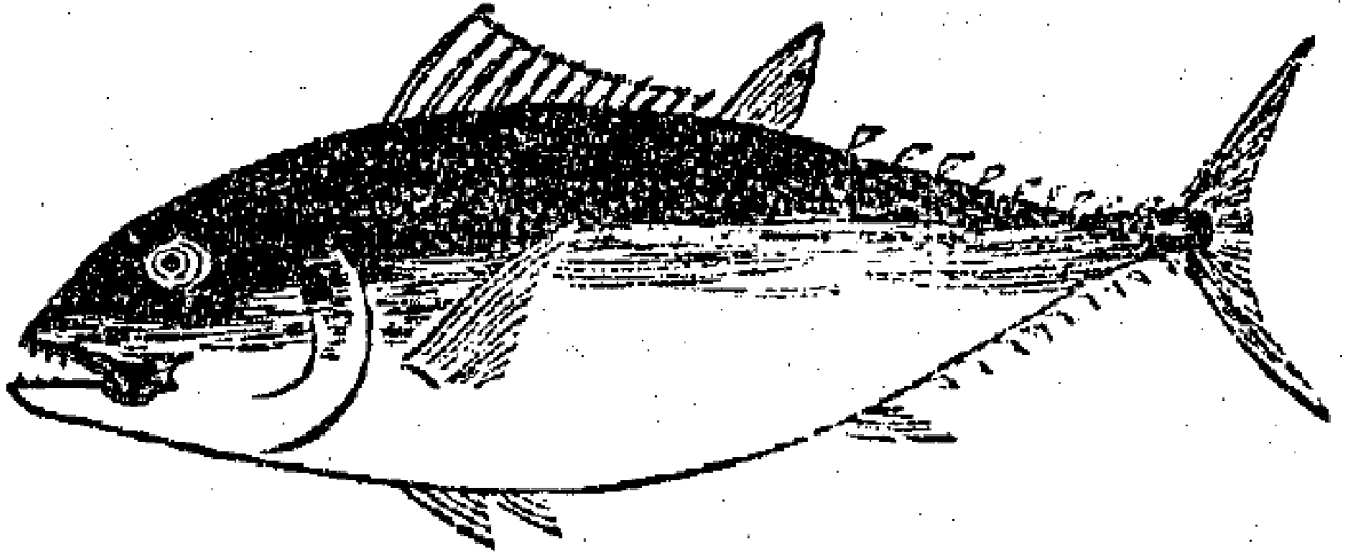


Fig. 3. Shibi in “Kokon Yoran Ko” (Yashiro, 1821-1824). The short pectoral fin matches Pacific bluefin tuna.
(古今要覧稿の「志比」の図。胸鰭が短いことからクロマグロに見える。)

そのあやふやさが広まって後の混乱を招いたかも知れない。日東魚譜の1854年の写本には「ヒナナカ」の記述があるが、これはいつの版から掲載されたのか分らない。あるいは古今要覧稿の内容をふまえた改訂版以後に掲載されていたのかも知れないが、それ以前に日東魚譜に掲載されていた可能性もある。

屋代弘賢（編）（1821-1824）の「古今要覧稿：ここんようらんこう」は、19世紀までの本草書の集大成といえる。編者の屋代弘賢は江戸の御家人である。記述内容は地域的な片寄りが少ない。本書では鮪、鰯、鰯のいずれをも「かぢとほし」に同定している。この「かぢとほし」は記載から判断するとカジキ類、特にマカジキを指しているようだが、そのほかにシロカジキ、クロカワカジキ、メカジキについての言及もある。王鮪、叔鮪、鰯子もまた「かぢとほし」に同定されている。鰯は「てふさめ」に同定されている。日本のチョウザメ類は近年はまれに近海に迷い込んだ回遊個体が現れるのみだが、かつては石狩川や天塩川でチョウザメ *A. medirostris* の溯上があった（北海道レッドデータブック作成部会、2003）。古今要覧稿では松前の産品への言及もあるので、この「てふさめ」は北海道に分布するチョウザメそのものを示していると考えられる。マグロ類はこれらとは全く別個に、「志比」として記載されている（図3）。本書は本邦におけるメバチの初出文献と見なされているが（Kishinouye, 1923）、果たしてそうなのか否かは検討が不十分である。本書にはキハダとビンナガの記述もあるが、初出か否かは分らない。

武居周作（1831）の「魚鑑：うおかがみ」は、本草書というよりは一般人向けの実用書である。上記本草文献類と比較してかなり軽快な、いわばポケット図鑑で、歌川国芳の図がついている。平野氏によれば、著者の武居周作は江

戸の日本橋に居住し、連日魚市場に通ったという（武居、1978の解説参照）。鮪（読みをユウとしている）の漢字表記については、万葉集に言及するのみである。

これら本草書のうち、古今要覧稿や大和本草の記述は博引旁証が本格的で、いずれも入れ子状の構成になっている。つまり、それより以前に出された各種の文献を数行（場合によってはもっと多く）ずつ抜き出し、それぞれの是非を論じている。したがって、両書を見れば、それ以前の関連箇所がどのように記述されているのかが分かる。

3. 鮪のその後

このように、ざっとではあるが日中の主要な本草書等を読むことで、漢字の鮪はマグロ類を指していなかったことが分かる。そして日本では、鮪の字は漠然と大きい魚を示していたが、やがて慣習的にマグロを示すようになった。その用法は、遅くとも本朝食鑑の時代には確定的となった。鮪を本来示していた魚種が日本には分布していないことは、日本の本草学者の一部は気がついてしたが、その正体についてチョウザメ類、サメ類やカジキ類を含めた解釈をおこない、混乱が生じた。マグロに対する漢字の鮪の使用はそのまま定着していったが、もともと示していた種が推定されるにはさらに時間がかかった。田中茂穂（1911）はシビとマグロの異同について若干の解説を行っているが、漢字名にまでは踏み込んでいない。1930年（昭和5年）にいたって、李時珍の本草綱目の和訳が各界の専門家の解説付きで出版された。ここで鮪その他、魚類の解説を行ったのが木村 重である（李、1930の解説参照）。木村氏は本草綱目の鮪を中国産の魚類のなかから「ヘラチョウザメ」と比定した。この魚種は後に呼称が変更され、シナヘラチョウザメとなった（李、1976の解説参照）。「鮪」の同定を行

うには、その記述のある本草書を読んでいること、マグロ類と中国産淡水魚類の両方に分類学的な専門知識を有することが必須であった。木村氏は多能な学者、岸上謙吉氏の弟子である。岸上氏はクモ、カブトガニ、サンゴ、エビの分類や生態、民俗学、考古学などの分野で活躍したが、魚類学では特にマグロ類の研究で著名である（岸上, 1915, 1917, 1918, 1921, 1926; Kishinouye, 1911, 1923）。じつは岸上氏こそが、最初に鮪の正体をシナヘラチョウザメと見抜いたのかも知れない。本件に関して岸上氏は何も書き残してはいない。しかし、師弟で鮪の字義が話題になったこともあり得るだろう。岸上氏は後年、中国の揚子江の淡水魚の調査探検中の1929年に客死した（Kimura, 1934; 佐伯, 1995）。木村氏もその探検に同道していた（Kimura, 1934）。岸上氏を除けば、木村氏はこの同定を最初に行いうるまさに最適の人物だった。

上記のような経緯で、漢字の鮪が現在のようにマグロを示すようになったと考えられる。なお、阿部宗明氏と菅原浩氏は「魚名の由来」という書名でマグロ類その他のさまざまな魚種の情報を出版される予定であったが、果たされぬままに亡くなられた（坂本一男氏, 2010年12月10日私信）。阿部・菅原両氏は鮪がシナヘラチョウザメを示していたことも把握していたらしい。おそらく、御両名の結論した鮪がマグロになるまでの経緯は魚類学の知識と古典文献の知識を駆使したものだっただろうが、今となっては分からないのが残念である。なお、本稿の推敲中に、田辺悟氏の「鮪（まぐろ）」が出版された（田辺, 2012）。本稿とは目指す方向性が異なり、結論も必ずしも同じではないが、共通する認識も見られ、心強く思われた。

謝辞

本稿を作製するにあたり、築地おさかな博物館の坂本一男館長には示唆をいただいた。本稿は元来、一書の一章として準備を進めていたが、その際には独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所（現 国際水産資源研究所）の中野秀樹氏、元遠洋水産研究所の鈴木治郎氏、OPRTの三宅 眞氏に初期原稿に有益なご助言を多々いただいた。北海道大学サステイナビリティ学教育センターの石村学志氏には英文要旨の作製について御助力をいただいた。また、匿名の査読者のご指摘により、原稿を大いに改善した。ここに感謝したい。

文献

Latinized author names in []. Author names of ancient Chinese are followed present Japanese pronunciations. “n.d.” means date of publication not determined.

尼岡邦夫・武藤文人. 2003. 世界のチョウザメ. ワシントン条約対象種. 水産資源保護協会. [Amaoka, K. and Muto,

F.]

Anon. (姫 旦 = 周公旦?). n.d.1. 周禮. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/rites-of-zhou/tian-guan-zhong-zai/zh> (2012年10月24日確認) [Ki, T. = Ji Tan = Zhougong Dan.]

Anon. (姫 旦 = 周公旦?). n.d.2. 爾雅. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/shuo-wen-jie-zi/zu-bu7/zh> (2012年10月24日確認) [Ki, T. = Ji Tan = Zhougong Dan. Jiga = Erya]

Anon. n.d.3. 詩經. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/book-of-poetry/zh> (2012年10月26日確認)

青木生子・井出 至・伊藤 博・清水克彦・橋本四郎 (校注). 1984. 新潮日本古典集成 (第六六回). 万葉集 五. 新潮社, 東京. [Aoki, S., Ide, I., Ito, H., Shimizu, K. and Hashimoto, S. (Eds./Exps.)]

Bonnaterre, J. P. 1788. Tableau encyclopédique et methodique des trois règnes de la nature... Ichthyologie. Panckoucke, Paris. i-lvi + 1-215, Pls. A-B + 1-100.

Cuvier, G. and A. Valenciennes. 1832. Histoire naturelle des poissons. Tome huitième. Livre neuvième. Des Scombréroïdes. v. 8: i-xix + 5 pp. + 1-509, Pls. 209-245.

Cuvier, G. and A. Valenciennes. 1844. Histoire naturelle des poissons. Tome dix-septième. Suite du livre dix-huitième. Cyprinoides. v. 17: i-xxiii + 1-497 + 2 pp., Pls. 487-519.

大東文化大学中国語辞典編纂室 (編). 1994. 中国語大辞典. 上. 角川書店. [Daito Bunka Daigaku Chugokugo Jiten Hensanshitsu (ed.)]

Duméril, A. 1869. Note sur trios poissons de la collection du museum. Un esturgeon, un polyodon et un malarma (Acipenser Dabryans, A. Dum., de Chine. – Polyodon Gladius, von Martens, de Chine. Peristethidion prionocephalum, A. Dum., de la mer des Indes.) Accompagnée de quelques considerations générales sur les groupes auxquelles ces espèces appartiennent. Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire Naturelle de Paris, 4: 93-116 + pls. 22-23.

北海道レッドデータブック作成部会. 2003. 北海道レッドデータブック. <http://rdb.ies.hro.or.jp/> (2011年11月13日確認) [Hokkaido Red Data Book Sakusei Bukai]

人見必大 (著). 島田勇雄 (訳). 1695 (1980.) 本朝食鑑 4. 東洋文庫. [Hitomi, H. (Auct.), Shimada, Y. (Translated from ancient Japanese to modern Japanese.)]

Jordan, D. S. and J. O. Snyder. 1901. Descriptions of nine new species of fishes contained in museums of Japan. Journal of the College of Science, Imperial University, Tokyo, 15(2): 301-311, Pls. 15-17.

貝原益軒. 1709. 大和本草. 卷之十三. 中村学園蔵書. <http://www.nakamura-u.ac.jp/> (2012/07/29確認) [Kaibara, E.]

貝原益軒. 1716. (1848年版, 第八版) 女大學寶箱. 奈良女子大学付属図書館女性関連資料. <http://www.lib.nara-wu.ac.jp/nwugdb/jindex.html> (2012年10月26日確認) [Kaibara, E.]

貝原益軒. 1712. 養生訓. 中村学園蔵書. <http://www.nakamura-u.ac.jp/> (2012年07月29日確認) [Kaibara, E.]

- 貝原好古. 1694. 和爾雅. 早稲田大学古典籍総合データベース収蔵. <http://wine.wul.waseda.ac.jp/> (2012年07月29日確認) [Kaibara, Y.]
- 郭璞. 3-4C. 爾雅注. 《四部叢刊初編》中第42冊. 景常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏宋刊本 本書三卷附音釋三卷. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/library.pl?if=gb&res=77342> (2012年10月23日確認) [Kaku, H. = Guo Pu]
- 神田玄泉. 1719 (1854写本). 日東魚譜. 卷之1-7. 早稲田大学古典籍総合データベース収蔵. <http://wine.wul.waseda.ac.jp/> (2011年03月04日確認) [Kanda, G.]
- 神田玄泉. 1741 (時期不明写本). 日東魚譜. 卷之1-2. 早稲田大学古典籍総合データベース収蔵. <http://wine.wul.waseda.ac.jp/> (2011年03月04日確認) [Kanda, G.]
- 邢昺. n.d. 爾雅注疏. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=80276&page=2> <http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=80276&page=7> [2012年10月23日確認] [Kei Hei =Xing Bing, Jiga So = Er-ya-shu]
- Kim, I.-S. 1997. Illustrated encyclopedia of fauna and flora of Korea. Vol. 37. Freshwater fishes. Ministry of Education.
- Kimura, S. 1934. Description of the fishes collected from the Yangtze-kiang, China, by the late Dr. K. Kishinouye and his party in 1927-1929. J. Shanghai Sci. Inst. (Sect. 3) 11-247.
- Kishinouye, K. 1911. Prehistoric fishing in Japan. J. Coll. Agr., Imp. Univ. Tokyo, 2(7): 327-382 + Pls. XIX-XXIX.
- Kishinouye, K. 1923. Contributions to the comparative study of the so-called scombroid fishes. J. Coll. Agr., Imp. Univ. Tokyo, 7(3): 293-473 + Pls. XIII-XXXIV.
- 岸上鎌吉. 1915. サバ・サワラ・シビ類の研究. 水産学会報, 1(1): 1-24. [Kishinouye, K.]
- 岸上鎌吉. 1917. 真口魚類中の新目. 水産学会報, 2(2): 1-4. [Kishinouye, K.]
- 岸上鎌吉. 1918. 叉骨類研究. 水産学会報, 2(4): 269-274 + 1 pl. [Kishinouye, K.]
- 岸上鎌吉. 1921a. 米国沿岸のシビ. 水産学会報, 3(3):239. [Kishinouye, K.]
- 岸上鎌吉. 1921b. 鮪鯉の研究. 水産界, 466: 360-362. [Kishinouye, K.]
- 岸上鎌吉. 1926. 大正十四年に於ける叉骨類(シビ・カツヲ)研究の概要. 水産学会報, 3(4): 125-137 + 1pl. [Kishinouye, K.]
- 洪亮吉. n.d. 曉讀書齋雜錄. Not seen. [Kou, R. = Hong, L.]
- 許慎. 100. 說文解字. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/shuo-wen-jie-zi/zu-bu7/zh> (2012年10月24日確認) [Kyo, S. = Xu, S.]
- 丘光明(著). 加藤淳一郎(訳). 2000. 中国古代度量衡. 計量史研究, 22(1): 77-96. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110002345627/en> (2012年11月14日確認) [Kyu, K. = Qui, G. (Auct.), Kato, J. (Transl.)]
- Linnaeus, C. 1758. Systema Naturae, Ed. X. (Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Tomus I. Editio decima, reformata.) Holmiae. v. 1: i-ii + 1-824
- Lowe, R. T. 1839. A supplement to a synopsis of the fishes of Madeira. Proceedings of the Zoological Society of London 1839 (pt 7): 76-92.
- Martens, E. von. 1862. Über einen neuen Polyodon aus dem Yantsekiang und über die sogenannten Glaspolypen. Monatsberichte der Akademie der Wissenschaft zu Berlin v. for 1861: 476-479.
- 松原喜代松・落合明・岩井保. 1979. 新版魚類学(上). 恒星社厚生閣. [Matsubara, K., Ochiai, A. and Iwai, T.]
- 目加田誠. 1969. 詩經・楚辭. 中国古典文学大系 第15卷. 平凡社. [Mekata, M.]
- 源順. (931-) 938. 和名類聚鈔. 早稲田大学古典籍総合データベース収蔵. <http://wine.wul.waseda.ac.jp/> (2011年03月04日確認) [Minamoto, S.]
- Mims, S.D., T.A. Georgi and C.H. Liu, 1993. The Chinese paddlefish, *Psephurus gladius*: biology, life history, and potential for cultivation. World Aquacult., 24(1): 46-48.
- 孟詵・張鼎. (685-) 688. 食療本草. 崑山科技大學電子書収蔵. <http://oa.lib.ksu.edu.tw/OA/bitstream/987654321/57981/2/004%E9%A3%9F%E7%99%82%E6%9C%AC%E8%8D%89.pdf> (2012年10月28日確認) [Mou, S. = Mao, S., Chou, T. = Chang Ting,]
- 諸橋徹次. 1968. 大漢和辞典. 第12卷. 大修館. 縮写版. [Morohashi, T.]
- 中村雅之. 2003. 古代半切の口唱法. KOTONOHA, 10: 1-2. <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/kushoho.pdf> (2012年11月13日確認) [Nakamura, M.]
- 西宮一民(校注). 1982. 新潮日本古典集成(第二十七回). 古事記. 第3刷. 新潮社. [Nishimiya, K.]
- Philippi, R. A. 1887. Historia natural.-Sobre los tiburones i algunos otros peces de Chile. [Plus:] Apéndice sobre el peje-espada, peje-aguja, peje-perro i vieja negra. Anales de la Universidad de Chile Sec. 1, v. 71: 535-574, Pls. 1-8.
- 李時珍. 1578. 本草綱目. 国会図書館貴重書画像データベース収蔵. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609005?tocOpened=1> (2012年11月16日確認) [Ri, Jichin = Li Shin-chen. Honzokomoku = Pen-ts'ao-kang-mu.]
- 李時珍(著). 木村重(校訂). 1930. 鱧魚. 鰻魚. Pp. 520-526 in 頭註國譯本草綱目 第十冊. 春陽堂. [Ri, J. (Auct.) and Kimura, S. (Ed.)] [Ri, J. (Auct.) and Kimura (Ed. /Exps.)]
- 李時珍(著). 木村重・上野益三(校訂). 1976. 鱧魚. 鰻魚. Pp. 582-588 in 新註校定國譯本草綱目 第十冊. 春陽堂. [Ri, J. (Auct.), Kimura, S. and Ueno, M. (Eds./Exps.)]
- 陸璣. 1779. 毛詩草木鳥獸虫魚疏. 国立国会図書館デジタル化資料収蔵. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541561> (2012年10月28日確認) [Riku, K. = Lu, J.]
- 陸德明. 583. 經典釋文 卷三十. 中國哲學書電子化計劃収蔵. <http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=82309&page=105> (2012年10月23日確認) [Riku, T. = Lu, D.]
- Richardson, J. 1846. Report on the ichthyology of the seas of China and Japan. Report of the British Association for the

- Advancement of Science 15th meeting [1845]: 187-320.
- 佐伯 修. 1995. 上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争. 宝島社. [Saeki, O.]
- 坂本一男. 2000 (2000). 魚名の由来. WEB 大学出版, 45. http://www.ajup-net.com/web_ajup/045/dokusho45-1.shtml (食料市場新聞2000年1月1日号の初出内容を加筆). [Sakamoto, K.]
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 (校注). 1965. 日本書記 下. 日本古典文学大系68. 岩波書店. [Sakamoto, T., Ienaga, S., Inoue, M. and Ono, S.]
- 新美 寛 (編)・鈴木隆一 (補). 1968. 本邦残存典籍による輯佚資料集成. 京都大学人文研究所. [Niimi, H. and Suzuki, S.]
- 武居周作. 1831. 魚鑑. 早稲田大学古典籍総合データベース 収蔵. <http://www.wul.waseda.ac.jp> (2011年3月9日確認) [Takei, S.]
- 武居周作 (著). 平野満 (解説). 1978. 魚鑑. 八坂書房. [Takei, S.]
- 田辺 悟. 2012. 鮪 (まぐろ). 法政大学出版会. [Tanabe, S.]
- 田中茂穂. 1911. 質疑応答 問二 マグロとシビとは同じものなりや, 吾国に於ける分布は如何, 外邦にも同種のもの産するか. 動物学雑誌, 23(270): 227. [Tanaka, S.]
- Temminck, C. J. and H. Schlegel. 1844. Pisces. In: Fauna Japonica, sive descriptio animalium quae in itinere per Japoniam suscepto annis 1823-30 collegit, notis observationibus et adumbrationibus illustravit P. F. de Siebold. Parts 5-6: 73-112.
- 寺島良安. 1712. 倭漢三才圖會 卷第五十一. 江海無鱗魚. 明治34-35年版. 中外出版社. 国立国会図書館近代デジタルライブラリ 収蔵. <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898184> (2012年11月16日確認) [Terashima, R.]
- 植木久行. 2009. 『増補 俳諧歳時記栞草』所引漢籍考. 人文社会論叢 人文社会篇, 21: 25-45. <http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/handle/10129/1922> (2012年10月28日確認) [Ueki, S.]
- 渡邊幸三. 1953. 李時珍の本草綱目とその版本. 東洋史研究, 12(4): 333-357. http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/138975/1/jor012_004_333.pdf (2012年11月13日確認) [Watanabe, K.]
- 屋代弘賢 (編). 1821-1824. 古今要覧稿. 明治38-40年版. 国書刊行会. 国立国会図書館近代デジタルライブラリ 収蔵. <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/897551> (2012年11月16日確認) [Yashiro, H.]

要 旨

漢字の鮪が日本でマグロ類を示すようになった経緯を日中の主な古典籍や本草書から追跡した。鮪とその関連漢字は紀元前1,000年の「周禮」にすでに現れ, 続いて「詩經」, 「爾雅」, 「説文解字」にも見られたが, これらに魚種特定につながる情報はなかった。3-4世紀の「爾雅注」のころから魚種が特定される記述が現れ, 諸文献の鮪とその関連文字は中国産のチョウザメ類3種のシナヘラチョウザメ *Psephurus gradius*, ダブリーチョウザメ *Acipenser daburianus*, カラチョウザメ *A. sinensis* のいずれかと考えられた。鮪の字の示すと思われる魚種は文献毎に異同があるが, 「經典釋文」の記述はシナヘラチョウザメによく合致し, これを「本草綱目」などの諸文献が継承したと考えられた。漢字は大陸から淡水大型魚の乏しい日本に導入され, そのうち鮪の字は記紀万葉の時代には海産大型魚の「志毘=しび」を指すようになった。江戸期には鮪はマグロ類を示すようになったが, 一部の本草学者は, 本来の鮪が日本産魚類に合致しないことに気がついた。しかしその魚種特定には至らないか, あるいはカジキ類等に誤った特定をした。鮪が本来示していた魚種の, 分類学的な観点からの推定は長らく行われなかったが, 「本草綱目」が和訳された際に, その解説で木村重がシナヘラチョウザメと比定した。木村の研究系譜は, マグロ類の研究者の岸上鎌吉と深い関係があるが, 鮪の魚種推定への岸上の関与の確認は得られなかった。